

氏名（本籍）	石島 久裕（兵庫県）		
学位の種類	博士（開発学）		
学位番号	甲第59号		
学位授与の日付	2016年3月19日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項の規定による		
学位論文題目	タンザニア国保健分野に於ける 5S-KAIZEN-TQM 手法の有用性と普及方法に関する研究		
審査委員	（主査）日本福祉大学	教授	岡本 眞理子
		教授	穂坂 光彦
		教授	千頭 聡
	台北医学大学	客員教授	半田 祐二朗

論文内容の要旨

アフリカ諸国では保健医療の質の改善と安全性の向上にむけた取組が WHO や各国援助機関の支援のもとに活発化してきている。しかし、公的保健医療システムの予算の多くを外部からの援助に依存している中で、新たな機材の投入ではなく少ない保健資源でも医療機関の担い手自身が自主的にサービスを向上させ、維持管理していくシステムの確立が求められる。そのようなものとして、JICA は日本の製造現場では広く普及している「整理整頓」や現場の職務チームによる作業環境の改善活動、そして部署を超えて組織全体がかかわる総合的品質管理、すなわち、5S-KAIZEN-TQM を導入してきた。その中でタンザニアは 67 もの病院が参加し、活発な活動が見られた。

本論文は、タンザニアに導入された 5S-KAIZEN-TQM 手法の有用性について検証し、またその普及のための効果的な方法についても検証しようとしたものである。

本論文は、全 7 章で構成されている。各章の内容は以下の通り。

第 1 章「5S-KAIZEN-TQM 手法の保健分野への導入に係る背景」では、タンザニア保健医療セクターが抱える問題や課題を明らかにし、サービスの質向上のための様々な取り組みや、タンザニア保健福祉省が 5S-KAIZEN-TQM を導入した背景について述べている。

第 2 章「5S、カイゼン、TQM 活動の普及の変遷」では、先行研究から、5S、カイゼン、TQM 活動の目的を明確にし、その変遷を辿っている。また日本型マネジメントがどのようにアフリカに導入され、普及されてきたかを述べている。

第 3 章「保健分野に於ける 5S-KAIZEN-TQM 手法の有用性」では、タンザニア国内の病院で行われた調査をもとに、5S-KAIZEN-TQM 手法の保健サービスの質の向上に係る有用性を検証している。クラスターランダム化比較試験を用いて、①患者満足度（サンプル 3292 人）、②職員満足度、（サンプル 2856 人）、③患者の待ち時間（サンプル 9114 人）について調査した結果を分析している。

①については、病院の清潔度、病院職員への信頼度など主観的評価において、統計的に有意な効果、②については、職場の清潔度や業務環境などへの満足度で、統計的に有意な結果がでており、モチベーションでは有意な差は見られなかったが、「差の差」分析では、介入群のプライド関連項目に差が見られた。③については、患者の待ち時間の測定値で「差の差」分析を行い、統計的に有意な差が見られた。

第4章「KAIZEN活動の効果の検証」では、タンザニア国内で実施されたKAIZEN事例を調べ、医療廃棄物の分別と費用削減など、諸活動の傾向とその効果について検証している。

第5章「5S-KAIZEN-TQM手法の普及に係る検証」では、タンザニア国内で行われてきた全国展開のための普及・定着活動の有用性について、チームアプローチや18の実施項目を説明変数とした5S活動定着に関する影響因子の分析、指導者研修の知識上昇率への効果などの検証を行っている。

第6章「国際保健医療協力に於ける5S-KAIZEN-TQM手法の活用」では、日本国際保健外交戦略とUHCの基本概念である「自立可能な保健財政の構築」への5S-KAIZEN-TQM手法の貢献、有用性について考察している。

そして、終章「結論と今後の課題」では、本研究から導きだされた様々な結果を整理し、タンザニアにおける5S-KAIZEN-TQM手法が、現場の抱える様々な問題の解決に有用であることを確認するとともに、資源の乏しい途上国への適用の可能性に言及し、今後引き続き行われなければならない研究課題を挙げている。

論文審査結果の要旨

1. 審査経過

申請者は2014年7月に論文執筆資格審査に合格した。その後、執筆資格審査の際に付された意見などをもとに論文の修正を積み重ね、表記の題目による学位請求予定論文を2015年9月18日に提出した。10月8日の国際社会開発の専攻会議において、第一次審査申請の受理が決定し、上記の3名からなる審査委員会が設置された。各審査委員は論文の審査に入り、10月26日には名古屋キャンパスにて申請者による発表と質疑応答を通じて論文内容を確認するとともに、改善すべき点を指摘した。それらを通じて博士論文としての水準と完成の可能性が認められたことから、12月10日の国際社会開発専攻会議で同論文の第一次審査の合格が決定した。そして12月12日に公开发表が行われ、論文内容の発表と質疑応答がなされた。

その後、第一次審査と公开发表会で指摘された点を中心に論文の加筆修正がなされ、12月18日に学位申請論文が提出され、12月21日の国際社会開発専攻会議にて受理が決定された。直ちに、第一次審査と同じ上記三名からなる審査委員に加えて台北医学大学客員教授の半田祐二郎氏に外部委員を委嘱して、本審査委員会が設置された。最終論文と提出書類の精査に加え、2016年1月6日に外部審査員も出席しての口頭試問を行った。その直後に、審査委員会で学位論文についての評価及び学位授与についての基本的合意に至った。

2. 論文の評価

本論文は次の点で評価できる。

まず、タンザニアの医療サービスの質にかかわる医療現場の管理にどのような問題があったかを明らかにし、新たな資源投入をあまり必要としない「5S-KAIZEN-TQM」の導入によって、それらがどのように変化したかを具体的に紹介している。

第二に、数多くの適用事例での「5S-KAIZEN-TQM」の効果について、それを検証するための複数の仮説のそれぞれに対して、明確な調査の枠組みに基づく統計的検証を多数のサンプルを採集して行っている。また、検証結果から効果が限定される場合の存在も確認し、無理な結論の導出をしておらず、実証研究としての質を十分備えているといえる。

第三に、本論文では、生産工学的な視点もいれて、なぜ効果を持ちうるのか、当事者達のどのような

意識と行動変容を通じて効果がもたらされるのかという点にまで踏み込んでいる。製造業界では「5S」や「カイゼン」はともすれば「日本のお家芸」や「やり方論」的説明に流されがちであったが、今後「5S」や「カイゼン」を他の分野に導入していく場合にもこの研究結果は貢献するはずである。

第四に、外部審査員からの講評にもあるように、この論文テーマ自体の先進性・有用性がある。従来、先進国が行ってきた発展途上国の医療・保健分野への支援は、長らく、人材、技術や資金・物資の投入という形でなされてきたが、それらの多くは持続性が低く、医療・保健サービスの質も低いままである。多くの国民が頼りとする公的医療機関は、上位機関から提供される予算を使い切るのみで、自立的な「経営管理」がなされないからである。投入できる資源の限られた低所得国においてこうした現状を変えるには、医療サービス提供の当事者の意識と行動変容が不可欠であり、本論文はその道筋を示したものとして意義がある。

3. 最終試験（学力の確認）の結果

前回の公开发表で指摘に沿った改善点に言及しつつ、論文概要の報告が一通り申請者によって行われ、それに対する審査員からの質問に速やかな応答がなされた。外国語に関しては、現地での調査が英語ですべて行われていることに加え、専門分野の学術雑誌に採用された共著での英文論文は申請者自身が基本的にすべて執筆していることを確認した。また、「5S-KAIZEN-TQC」の他の発展途上国への普及可能性に関する質問で、農耕民族としてのタンザニアの特性やコミュニティの在り方との関連が述べられ、社会開発にかかわる者にとって必要とされる洞察力や教養が確認された。

4. 結論

以上のことから、本審査委員会は、学位申請者石島久裕氏は、日本福祉大学学位規則第12条により博士学位（開発学）を授与するにふさわしいと判断し、合格と判定する。

以上